山梨県農業信用基金協会

1. 山梨県の紹介

山梨県は、富士山をはじめ南アルプス、八ヶ岳、奥秩父と四方を山に囲まれた日本でも有数の山岳県です。

豊富な自然や美しい水に支えられた農産業や工業などの様々な日本一があり、ぶどうや桃などの農産物や、ワイン、ジュエリーなど優れた県産品は「やまなしブランド」として、国内外で親しまれています。また、日本一といえば、先に行われた天皇杯JFA 第102回全日本サッカー選手権大会でヴァンフォーレ甲府が日本一になりました(*^▽^*)

存続の危機にあったプロビンチャが成し遂げたジャイアントキリングは、山国の基金協会が大規模な保証機関に立ち向かう勇気を与えてくれました　(` ー ´)/。ありがと～（アントニオ猪木調）

2. 山梨県の農業

山梨県は全体の77.5%が森林です。

農地はわずか5.7%と非常に狭く、しかも農地の３分の２は山沿いの地域にあり、農業を行うには不利な条件で、農家一戸あたりの耕地面積は、全国平均値の約３分の１（0.74ha）と狭いですが、その狭い農地を最大限に使い、ビニールハウスなどの施設栽培が行われるなど、土地生産性（10aあたりの生産農業所得）は常に全国上位となっています。

変化に富んだ自然条件を活かしながら、農業者のたゆまぬ努力と高度な生産技術の確立などにより、果樹、水稲、野菜、花き、畜産などの特色ある産地を形成しています。

中でも、果樹が農業生産額の６割以上を占め、ぶどう、もも、すももは、全国一の生産量を誇っており、東京などの大消費地に近い立地条件を活かし、県内の各地域でそれぞれの特性を活かした農業が行われています。

また、畜産分野においても、黒毛和種肥育牛の「甲州牛」、ワイン製造の過程で生ずるぶどうの搾り粕を飼料に育った「甲州ワインビーフ」、ウイスキー粕やビール粕を飼料に与えた「甲州麦芽ビーフ」、長年研究し優れた肉質の系統豚「フジザクラポーク」、低密度の土の上で放し飼いで育てる「甲州地鶏」の５種類の銘柄食肉があり、ブランド化を進めています。

3. 山梨県農業信用基金協会の概要

当協会は、理事12名（うち常勤1名）、監事3名、職員6名で、総務部、業務部の2部体制で業務運営を行っています。

職員6名の平均年齢は38.3歳ですが、うち一名が6歳ほど平均年齢を押し上げています。

前列左より小棹主査役、三井専務、齊藤課長
後列左より小澤参事、平岡、寺島調査役、村松

4. 山梨県農業信用基金協会の活動

当協会では、他保証機関の県域導入もあり、平成22年度から令和2年度までの10年の間、保証残高が右肩下がりとなり、300億円前後まで落ち込みました。

そこで、保証残高の回復に向けた一手として、JA住宅ローンの保証料体系について、他県の情報を参考に山梨版を作成し、令和2年度より借入者の信用リスクに応じた段階別保証料を導入しました。

これは、競合他社との競争力を十分に確保した保証料体系でしたが、当初は「協会の保証料は高い」とのイメージを払拭できなかったこともあり、全JAの融資担当部門を訪問し、協会保証の優位性を訴求するとともに、以降も顔の見える保証機関として、積極的にJAに出向き、信頼関係の構築に努めました。

これまでの「待ちの姿勢」から「攻めの姿勢」に転じた結果、令和3年度については16,478百万円の新規引受となり、前年実績4,514百万円を大幅に上回りました。保証残高についても、前年度末より12,279百万円増加し42,702百万円となりました。

令和4年度も昨年度を上回る引受となっており、期中にあって、保証残高が500億円を上回りました。

また、行政や農業法人と協調し、地域小学生を対象とした「食農プロジェクト」に参画し、米や野菜の植え付けから収穫祭までを通じて、次代を担う子ども達に、食と農の大切さを伝えています。

本県においても、人口減少や少子高齢化等による深刻な農業の担い手不足や、それに伴う耕作放棄地の増加など、農業を取り巻く環境は非常に厳しいものがありますが、厳しいからこそ、農業者の負託・期待に応えることのできる地域に根差した公的保証機関でありたいと思っています。